
世継ぎ問題（仮）

佐々木 沙女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世継ぎ問題（仮）

【Nコード】

N6663Z

【作者名】

佐々木 沙女

【あらすじ】

優秀で民に慕われている女王陛下が治める帝国、しかし、世継ぎが居ない問題が勃発。彼女が中々踏み出せない問題だったが…。

その1 (前書き)

いつまでも続けられるか、わかりませんが。

その1

「陛下。いい加減にして下さい。」

もう、この事は国をあげての一大事なのですから。」

「分かっている。」

「お分かりなら、何故私の意見を聞いて頂けないのでしょうか!?!」

宰相様お可哀想に…、と誰しもが同情の眼差しでみていた。

「いつも言っているではないですか、世継ぎがないのですから、養子なりとるとか…、なんなら今からでも産みますか?」

「それもいいかもな」

「はっ、そうですか。じゃあ、さっさと相手見つけて産んでください。」

いつもの様に宰相様が、はぐらかされて終わりだ。しかし、今日は違った。

「ジル。」

その問題だが、解決しようと思う。

四公を呼んでくれ。」

あまりの驚きに、宰相ことジルバート・スチュワートは思考が止まった。

「えっ!?!本当ですか!?!」

「ああ。」

間髪入れずの返事に、今度はその話を聞いていた者達が驚きの声をあげた。

その2

『四公』とは、大貴族である。

大貴族とは、北のアルバース公爵、南のクラウス公爵、東のグルーヴィー公爵、西のステリア公爵 を総称して『四公』と呼ばれる。

数日後。

王の執務室に、四公が集まっていた。

北のハルビル・アルバースは代々武将の家柄で、体格のよい大男。黒髪の短髪で顔には傷がある。

「ジルがとうとう陛下が腹を決められたと言っていたが、本当か？」

南のブラウン・クラウスは、知識人の為学問に多くの力を注いでいる。少し長めの胡桃色の髪で、眼鏡を掛けている。

「ええ。私にも実に嬉しそうに話しておいででしたが。」

東のアマリリス・グルーヴィーは、四公の中で唯一の女性である。

本来ならば、男性継承である公爵家を継ぐ事を特例で認められている。栗色の長い髪で、可愛い顔をしているが中身は…。

「ジルの被害妄想でなくて？」

「いつも、あの御方はジルで遊ばれているじゃない。」

西のジーク・ステリアは、最も領民からも慕われている。ある意味顔で…。茶髪で派手な顔立ちをしている。若い頃はさぞかし遊んでいたと言っ噂。

「さあ、それは我らが陛下に会って見ないと真実は分からないよね。」

ト

執務室の扉がノックされた承の返事もなく開いた。

その3

この部屋の主であり、ライヴィイ国の主でもある国王 ティアナ・ラグナロス が金髪の長い髪を靡かせながら、宰相ジルを伴って入って来た。

「わざわざ遠い所を、すまないな。」

「いいえ、陛下のお召しとあらば私はどんなに遠い地に居りましても、すぐに飛んで参りますわ。」

「アマリリスの陛下鼻肩がまた、始まったな。」

陛下に引っ付いて離れないアマリリスを皆が呆れた様子で見っていた。陛下は宰相に目配せし、何とかアマリリスを落ち着かせて、椅子に座らせた。

ティアナは疲れた顔で、紅茶を一口飲んだ。

「今日集まって貰ったのは、ジルから聞いていると思っが…」

「では、お決めになられたのですか。」

興味津々な顔で、クラウス公が尋ねた。

「どうしたらよいと思う？」

「はっ？」

「……。」

部屋の中に静寂が訪れた。

その4

部屋の中に静寂が訪れた。

一番早く正気に戻った宰相ことジルは、沸き上がる怒気を抑えることが出来ず叫んだ。

「陛下あ!!!」

あなたって人は、毎回毎回私で遊んで良いと思ってるんですかー!!」

「楽しいではないか」

「。。。」

四公達は、また陛下の宰相弄りが始まったと、微笑みを浮かべその場が和んだ。

本人は、ジルの怒りを気にもせず優雅に紅茶を啜っていた。

一頻り陛下の愚痴を言ったことで、宰相ことジルは落ち着きを取り戻した。

同郷の誼よしみでハルバース公が最後まで、聞いてあげることが最早お約束である。

「さて、恒例のジル弄りも終わったことだし、陛下そろそろ本題に入って頂けないでしょうか?」

「ジーク、お前は私に話かけるないつも言っているだろうが!!!」

ステリア公ことジークが、陛下に話しかけた事によって部屋の温度が一、二度下がったのは気のせいではない…。

その5

ステリア公と陛下は仲が悪い。

昔はそれほどではなかったのだが、いつの間にか二人は犬猿の仲になっていた。原因は不明だ。

「まあまあ、落ち着いて下さい。

あなた方がケンカを始めてしまったら、終わらないでしょう。」
言葉は優しいが表情が怖い。

「ごめんなさい。」

ブラウン・クラウド公は普段は優しいが怒らせると、恐ろしい目にあつと経験上分かっているので直ぐ様二人は謝罪した。

咳払いをし、

「早速、本題に入る。

以前からジルや皆が心配している世継ぎだが、そなた達の子を貰えないだろうか？」

「私は喜んで差し上げますわ。私と陛下の結びつきが益々強くなりますわよね。」

アマリリスが、嬉々として言った。

。

「クラウド公、アルバース公、ステリア公 アマリリスはこう言っているが、別に強制ではない。

意見を聴こう。」

思案顔でクラウス公が発言した。

「それは我々だけの一存では申せません。

本人に聞いてみなければお答えしかねますが。」

クラウス公の意見にアルバース公、ステリア公も賛同した。

「それは最もだ。

本人に国を受け継ぐと言う強い意志がないと、民が哀れだ。」

ジルに目配せし、皆の前に紙を置いた。

「一通りの条件は書いておいた。それを基に検討をしてくれ。」

一ヶ月後此処に何人集まるかな？

と、意地の悪い笑顔を浮かべ皆を見送った。

国王の条件

四公に渡された書面の、一部抜粋。

- 、 国を愛すること
- 、 民を虐げない
- 一、 公爵家の後継ぎではない者
- 、 男女問わない

……

……

……

執務室を出た後、控えの間に来ていた。

「何だこんな簡単でいいのか？」
条件を読んだ後、拍子抜けした。

「ハルビル簡単が一番難しいのですよ。」
ため息を吐きながらアルバース公に注意した。

単純だからこそ、おろそかにするが出来ない。おろそかにすれば民は離れていき、国などなくなってしまう。

「うっ、分かっているよ……、多分。」
深く考えずに言った事に、反省した。

「そうね……。陛下の中に常にあるのでしょうかね。」
国などに縛られて、可哀想な人……。」

最後の言葉は、憐れむものではないが、彼女の本心だったのかも知れない。

「……………」

「ところでジークは、何処行ったんだ？」

「そうね。」

来る時は一緒に居たはずなのに、いつの間に……」

「さあ、愛しい人にも会いに行っただんじゃないですか？」

その6

天気は快晴。

まるで未来ある若者達を応援している様な天気だと、ティアナは思った。

謁見の間に正装し玉座に座る彼女の前には、決意を決めた者達が居た。

北のハルビル・アルバース公の三男 ビルズ・アルバース(14)
焦げ茶色の少し長めの髪で、母親似な彼はそわそわと落ち着きがない。

東のアマリリス・グルーヴィー公の長女 マリア・グルーヴィー(15)
母親譲りの栗色の髪で可愛い顔をして、堂々としている。

西のジーク・ステリア公の長男 カイル・ステリア(16)
金髪で甘い顔立ち、父親似ている。

同じく長女 リリア・ステリア(16)
茶髪で兄と同じ顔している。双子だ。

南のブラウン・クラウドス公は、適任者がいないと断りがあったのを了承した。

全員が揃ったのを確認し、陛下が挨拶を始めた。

「まず、皆の気持ちに感謝の言葉を贈ろう。

ありがとう。」

深々と頭を下げた。驚いた。

国王が下の者に頭を下げるなど聞いた事がない。

少しの動揺を感じとったティアナは

「この礼は国王としてではない。」

ティアナ・ラグナロス個人が感謝を述べるのだ。」

世継ぎが原因で、要らぬ苦勞を掛ける若者達にせめてものお詫びの気持ちを含めて…。

「事前に報せた通りこれから城で、勉強に励んでもらいたい。

早速、明日から始めるに当たって何か質問があるか？」

勢いよく手を挙げたのは、マリア・ブルーヴィーだ。質問したくてさつきからウズウズしていた。

「お聞きしたいのですが、何故ステリア公だけお二人なのですか？」

マリアの質問は謁見の間に居る誰しもが思ったことだ。

条件には一人だと決められていたはずなのに。

「私もお聞きしたいのですが。」

ステリア公にお子様がお二人のはず、どちらかが公爵家の跡継ぎですよね？」

宰相ジルも、困惑気味に聞いてきた。

「一人だと言ったんだかな…。」

ステリア公もどちらに後を継いでもらうか悩んでいると言っていた。

両方優秀であるが為に決めかねていたらしい。

そこに今回の話が舞い込んできたので、これ幸いにと二人を送り込んできた。

もし双子のどちらかが選ばれた場合、選ばれなかった方が領地に帰り後を継ぐ事になっているそうだ。

あまりに粘るので、全領民の了承が得られたのなら特例として認めると言った。

「それで、これが結果だ。

あいつの顔に領民は、騙されている。」

ティアナは不貞腐れてしまった。

不可能を可能にする男の子だ世継ぎにはぴったりなのかも知れない。
と周囲の者達は密かに思った。

「君達の未来が、この国を善き方向へと導いてくれる事を願う。」

ビルの決意

ビルズ・アルバースは、ハルビル・アルバース公爵第6子としての世に生を受けた。

女3人、男2人子沢山なアルバース公ではあつたがビルを可愛がっていた。

母、兄や姉達も年の離れた弟を可愛がった。

未っ子で可愛がられてはいたが、我が儘にはなれなかった。

忙しい家族を気遣い、家で大人しくしていた。

その性が、人見知りか、激しく家からあまり出なくなっていた。

しかし、いつまでもこんな性格ではダメだと感じていたが自分では、どうにもきっかけが掴めなかった。

そんな時に今回の話が舞い込んできた。

「ビルズ。

あのさ、陛下に頼まれたんだけど、お前さえ良ければ、俺はビルズを推したいと思ってるんだかどうだ？」

父が僕をおしてくれるだなんて、驚いた。

まだまだ、小さい子供扱いだと思っていたのに、嬉しかった。

「父上、僕でいいのですか？」

「ああ。

お前はまだ小さいが将来は大物になりそいだからな。」

笑顔で頭を乱暴に撫でられた。

「ゆっくり考えるといい。但し、自分の可能性を諦めるなよ。」

父の最後の言葉が突き刺った。

その後の事はあまり覚えてない。気付いたら自分の部屋にいた。

父には自分の悩みなど筒抜けなんだなと、窓から覗く月を眺めた。

いつまでもそうして居たかったが、来客を知らせるノックが響いた。

入って来たのは、母だった。

「ビルズ、あなたご飯も食べないなんて心配するじゃない。」
ぷりぷり怒りながら、夜食を持ってきてくれた。

「母上、すみません。食欲がなくて…」

「旦那様が言った事気にしてるのね。」

「……。」

「貴方が産まれたのが遅かったじゃない？」

旦那様は上の子達が産まれた時、お城で仕事していたから一緒にはいられなかったの。だから、子育ては私任せでね。

貴方が出来たって分かった時、自分が育てるんだってはりきってたのよ。」

可笑しそうに、笑いながら語ってくれた。

初めて聞く自分が産まれる前の話。

「こつちに戻っても忙しさは変わらなかったけど、少しでも時間が出来ると、貴方の顔を見に来たの。」

私とどっちが好きなのって、喧嘩した事もあったのよ。」

何だか容易に想像出来てしまう夫婦喧嘩だ。

最後はお前が一番だよって言ってくれたのよって恥ずかしそうに告白した。

「あなたは私達の自慢の息子なのだから、自信を持ちなさい。」
言うだけ言って母は部屋から出ていった。

心配させてしまった。

母は元気のない僕を氣遣って励ましてくれた。

小さい僕の世界を広げる為に父なりに、考えてくれていた。後は自分が決めるだけ、心が少し軽くなった。

お腹すいた。

その日の母のご飯がいつもより美味しく感じた。

「いつてきます。」

「いつでも帰ってらっしゃい。」

待ってるから

優しい母の言葉に見送られて旅立った。

マリアの憂鬱

「はあ。もうダメ。」

どうしてあれが赦されているのかわからないわあー！！」
マリア・グルーヴィーは叫んだ。

「まあまあ、お姉さま落ち着いて下さいな。」

一つ下の妹アリア・グルーヴィーは、姉の苛立ちの原因が分からなく優しく優しく声をかけた。

「アリア、私は我慢の限界なの！！」

バンバンと机を叩いて憤っていた。

「あなたはいいの？」

「いつも言ってるではありませんか。
人それぞれなのですから、私達が何を言っても変える事は出来ないと。」

姉のマリアは、気性が激しい、妹のアリアはおっとりとしている。
姉妹は正反対の性格をしていたが、仲がよかった。

「それに陛下が赦されているのですから。」

それがそもそもの原因だ。

何故、容認されている。国家規模の陰謀、それとも、もっと別の何かなの。

一人悶々と、考えを廻らせていると

「そうそう。」

それに、母さんが折れる訳ないよ。」

今まで傍観していた一つ上の兄アギト・グルーヴィーが話に入ってきた。

「母さんなんて呼ぶんじゃない！！」

マリアは母アマリス・グルーヴィー公爵のことで怒っていたのだ。と言ってもマリアが一方的に怒っているだけであって、アマリスは気にもとめていない。

兄のアギトが何気なく言った。

「それならいつそ王様にでもなったら？」

「そんなの無理に決まってるでしょ。」

と、その場は笑い話で終わった。

後に、この話は現実に近いものとなるのは今はまだ誰も知らない。

カイルの焦燥

俺には双子の妹が居る。

多分、仲は悪くない。

しかし、今は少し距離をおいている。

喧嘩した訳じゃない。

ただ、俺たちの間に問題が生じた。

15歳の誕生日に、いきなり親父は妹と俺のどちらかに家を譲ると言い出した。

公爵家は、代々男子優勢で継承され、一部例外は除き、みなそれに倣ってきた。

順当にいったら次のステリア公爵は俺のはずなのに。

「優秀な方に継いで貰いたいしさ。」

それに地位に、甘えて欲しくないんだよね。」

軽い口調で言っではいるが、親父の言葉は重みがあった。

確かに昨日までは俺が家を継ぎ、妹は何処かへ嫁いで行く。それが普通だと思っていた。

「カイル兄さんに何か不満でもあるんですか？」妹の声に我に還った。

「別にないよ。」

「なら、どうして？こんなことに意味はありません。」

妹ははつきりと拒絶した。

「じゃあ、家から出ていきなさい。」

カイルも不満なら出ていっつていいよ。」

親父は、本気だ。

俺達は所詮子供だ。

公爵家と言う価値が在るから大事にされているだけで、庶民の子達

と変わりはない。

”了承”の答えしかないのだ。

16歳の誕生日にまた親父の言葉に驚かされた。聞き間違いに決まっている。そんなことはあり得ない。

「だから、二人にお城へ行って陛下の世継ぎになって欲しいんだよね。」

「……。」
妹と顔見合わせて驚いた。

「許可は貰ったから、遠慮なく行っておいで。」
上機嫌で語ってくれた。

ステリア公爵はどうするのか聞くと、陛下が選んだ後に決めるそう
だ。

馬鹿らしくなった、今まで親父に認められる後継者になろうとしていたのに、無駄だったんだと悟った。

「俺は行かない。」

もう親父に振り回されるのは、ごめんだ。
自分から出て行ってやる。」

扉に手を掛けて、出ていこうとすると親父の声に振り返った。

「お前達、母親に会いたくないか？」
「……！」

親父から、母親の話が出るなんて意外だった。
母親の事を聞いても一切教えてはなかった。

ただ、そばに居なくても愛されると言っただけだった。

「世継ぎの話と母親が関係があるんですか？」

「勿論。」

関係なかったら言わないよ。
どうするカイル、リリア？」

親父の方が一枚も上手だった。敗けを認めるしかなさそうだ。
”了承”の返事をした。

「お城に居るよ。
後は自分達で探しなさい。」

出発の日親父から俺は万年筆、妹はネックレスを貰った。
母親から初めての誕生日プレゼント。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6663z/>

世継ぎ問題（仮）

2011年12月26日01時54分発行